## ~ 戦わない建築家

## 手塚貴晴+手塚由比 建築力タログ 1·2·3 (TOTO 出版) \*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*









- ■カタログ1. ひたすら思いつくままにアイデアを (1995-2006)
- ■カタログ2. 建築を設計している同業者へ (2006-2008)
- ■カタログ3. 何のために建築をつくってきたか (2009-2015)

- ■屋根の家や、ふじようちえんで有名な二人の建築家の作品集。私たちは実作で語る建築家です、との言葉通り、 文章は106のプロジェクト(1995-2015)ごとに、2-3行と、巻末10p程度となっています。 作品の根本には、アウトドア好きと、ロンドンで過ごした日常があるようです。
- ■1990~1994 年ロンドンのリチャード・ロジャース事務所勤務。住んでいたロンドンのアパートは天井高4m、50 ㎡ほどのワンルームで、10 人程度、友人を呼んでもパーティを開いて何の不自由もない。 週末、近くの公園までサイクリング。公園のティーハウスでポテトを頼んで、テムズ河に沈む夕日を二人で眺める。事務所からテムズ河に突出したバルコニーへ同僚と繰り出し過ごした、アフタヌーンティーのひととき。あの日常の楽しさをそのまま建築にできたら、どんなに素敵だろうと思う。
- ■建築家というと、どうしても「一生懸命毎日毎日夜中もがんばって徹夜して」というイメージがあるんですけれども、われわれはできるだけそうしないようにしています。・・・われわれは家族をすごく大事にします。
- ■世の中には建築で解ける問題と解けない問題がある。建築が取り扱うのは現象で、たとえば「少子化問題」ではなく、「理想的な都市部の学童保育の在り方を考える」というところまで議論のレベルを下げていくと 建築の出番が出てくる。出入り自由な、親も活動に加われる場の建築を提案すると、状況がかわり、人を閉じ込める・人を呼び込む、は全く違う。その違いを提案する。
- ■この世は建築を中心にできている。言い過ぎのようでこれは事実。人は建築の向こうに何を見るのか? 「夜景が美しいのは光一つひとつの瞬きに人間の営みを観ているから」という、灯の哲学に近くて、閉じられた議論でのみ成立する建築に未来はない、としています。 自由貸出可(黒野晶大)



